

接尾辞「がち」と「ぎみ」について

幸田 佳子

A study of the suffixes *-gachi* and *-gimi*

Yoshiko Koda

This paper discusses the meanings of the suffixes, *-gachi* and *-gimi*. Although both mean a tendency, there is a difference between them.

-Gachi transforms the noun form of *katsu* (win) into an adjective-forming suffix, whereas *-gimi* transforms the noun, *kimi* (a feeling) into a nominal-forming suffix.

When *-gachi's* base is an active verb (transitive verb), a stative verb (intransitive verb) or an active noun, it means one tends to do the same thing in spite of some negative experiences. On the other hand, when *-gimi's* base is a stative verb or a non-active noun, it means what one feels now.

From the viewpoint of syntax, they have an effect not only on their bases but also on their sentences, looking like *souda* and *-yasui*. In context, there is an unfavorable nuance before or after a *-gachi* sentence, but *-gimi* can have either an unfavorable or a favorable nuance. *-Gachi* sentences often express *tokaku ~ sigatida* (carelessly, be apt to do).

1. はじめに

接尾辞は接頭辞とともに接辞として語を構成する要素の一つであるが、独立した一語ではない。すなわち名詞や動詞などの元になる語（語基）に付いて複合語を形成する。さらに派生して語基と接辞が結びついて意味を変化させ、派生語の形とる。

1) 勝ちに行く → 一人勝ち → 忘れがち

最初の「勝ち」は「勝つ」の連用形の名詞で意味もそのままだが、複合語の「一人勝ち」は連濁しているが、意味は残る。派生語「忘れがち」は連濁だが漢字を使わず、接尾辞となり、意味も「勝つ」の意味はなくなり、「忘れることが多い」の意味に変化する。派生語「忘れがち」はナ形容詞になる。

接尾辞はこのように語の構成要素の一つとして意味の付加や品詞転換をし、語の生産性を高め、意味を拡大している。このことは語彙の問題にとどまることなく、文や文脈に影響を与えることになる。

2) 夏場はつい簡単なものを作りがちだが、それでは夏バテになりやすくなる。手軽な和食でバランスをしっかりとろう。

2) の例で「がち」は動詞語基「作り」で派生語を形成しているが、述語であるために、文全体「夏場はつい簡単なものを」を受けて節のようにふるまっている。そして「それではよくない」というニュアンスが含まれるので、前後の文にそのニュアンスを結びつけた文が表出する。

この論では「傾向」の意味を持つ「がち」とこれと類似する「ぎみ」を比較しながら、接尾辞への派生と語基の種類や意味を見ていく。そして語基が動詞の場合、前の修飾語すべてを含んだ節までを「がち」や「ぎみ」が受け止めていることを考察する。特に「がち」は接続表現のようになっていることを見ていきたい。

2. 先行研究

まず、『日本語学』（1986）で接辞全体について形態論の中で位置づけを行い、各々の接辞を特集している。特に阪倉は「接辞とは」（1986）で語彙形

成の複合語と派生語がはっきり区別できるのでなく、「連続的」と捉えている。確かに「がち」と「ぎみ」の名詞、形容詞語基を見ていると、複合語と考えられるものもあるからだ。⁽¹⁾ もう一つは「接尾語」⁽²⁾ について補助動詞の例（「～損なう」「～かける」など）ではあるが、この後部要素が意味的・機能的に取りまとめて前部要素は包摂される関係だと述べている点だ。さらに森山の「接辞と構文」（1986）でも「本来形態的な語形成レベルのものが意味的に語を超えた統語論的なレベルのものを包摂しているので、・・・」と接尾辞での例をあげている。⁽³⁾

このように語基を越えてどこまで含むかの指摘は「がち」「ぎみ」の接続表現の要素を検討していく上で参考になる。

次に、「がち」「ぎみ」の意味や用法は『中上級を教えるためのハンドブック』と森田（1989）で記述されている。特に森田（1989）では「がち」と「ぎみ」のもつニュアンスを分析しているので本論では検討したい。

最後に語の構成要素を中心に山下（1995）が形容詞接尾辞の「っぽい、らしい、くさい」を考察している。さらに黄（2004）は接尾辞全体と各々の接尾辞（名詞・形容詞・動詞接尾辞）を認知論の手法で分析している。「がち」と「ぎみ」直接関係するわけではないが、考察方法を参考にしたい。

3. 「勝ち」から「がち」へ

3-1 「がち」は「勝つ」の連用形「勝ち」が名詞としてあり、「勝ち負け」「負けるが勝ち」などがある。複合語を形成しても「勝つ」の意味は残り、「一人勝ち、粘り勝ち、戦略勝ち」などがある。そして接尾辞「がち」に派生すると「勝つ」の意味が変化して、「その傾向がよい、何度もそうする」の意味に変わる。「病気がち、曇りがち、不足がち、思われがち、言っけがち」などになる。

3-2 「がち」の語基を見ていく。『中上級を教える人のためのハンドブック』では、「傾向」の接尾辞として「-げ、-がち、-気味、-っぽい」と一括りに捉え、語基の品詞の意味で接尾辞の意味を分類している。

- ① (語基) が変化や動作を表す動詞の場合 * (語基) は筆者補足
(語基) の変化や動作が生じやすい傾向をもっていることを表します。
- ② (語基) が状態を表す形容詞や名詞の場合
完全にそうとはいえませんが「語基」の表す状態に近いことを表します。

全体的な意味なので、「がち」と「ぎみ」の違いがわからない。また、どんな語基を取るのか、同じ語基の場合に違いはあるのかなど語基の語義を見ていかないと相違点は見えてこないだろう。

どんな語基の特徴があるのか傾向を見てみる。実例で「がち」の場合、479例中422例が動詞語基で、名詞語基は56例である。そのうち動作性の名詞は11例である。⁽⁴⁾ 傾向として「がち」の多くは動詞と動作性名詞が語基になることが多いことがわかる。

まず変化や動作を表す動詞語基となると、意志、無意志動詞関係なく「休み、買い、遊び、考えられ、陥り、遅れ、怒り、あぶれ、見失い」などがある。意味は繰り返し同じような動作をする、その状態が起きることから傾向として捉える。

また、動詞の場合、文法的な形態がどこまで付くのであろうか。

- 3) ・読みましがちだ × ・読ませがちだ ○ ・読まれがちだ ○
・読んでしまいがちだ ○ ・読んでみがちだ ○ ・読んでおきがちだ ○
・読んできがちだ ○ ・読んでいきがちだ ? ・読みはじめがちだ ?
・読んでいがちだ × ・読んでありがちだ ? ・読み切りがちだ ?

3) から動詞の使役、受身、テ形の補助動詞「～ておく」までは付くが「～ていく」からのアスペクトが入ると、内省だが、付きにくいようだ。これは「がち」の意味がアスペクトと合わないためだと考えられる。「がち」は時間の途中経過を問題するのではなく、動作の繰り返しを捉えているからである。

しかし完了の「～てしまう」に「がち」はつきやすい。なぜなら「がち」が付くと「～てしまう」(完了の意味のアスペクト) が完了する動作について何度か繰り返すことを述べる形になることと、「～てしまう」のニュアン

ス—残念、うっかり、不都合—が「がち」のニュアンス—またも同じような、よくない動作になる—と合致するからであろう。

- 4)-1 きついと、ついやめてしまいがちだ。
- 2 小さいので見落としてしまいがちになる。
- 3 後回しにしてしまいがちなところもある。

3-3 次に名詞は、「遅刻、不在、不足、停滞、増加、留守、出張、実行」など動作性の名詞が多く動詞同様、動作に注目するため造語力が高い。また動作性でない名詞「伏し目、黒目、山、雨、曇り、遠慮」などは慣用句的な語になっている。複合語とはいえないが、「その状態が勝^{まさ}っている、多い様子」となるだろう。「伏し目がち」は気持ちを隠すような様子^まの意味、「黒目がち」は目の大きなという美人の形容語になる。やはり派生語であろう。

同様にナ形容詞語基も「不満、ほんやり、軟弱、強気、臆病、凡庸、未熟、狡猾」など、「その状態が多い様子」となり、「ぎみ」との類似性が出てくる。

「がち」は複合語を形成し、さらに接尾辞に派生し、「勝つ」の意味はなくなる。接尾辞「がち」は動作の繰り返しを支えてその傾向にあるとなるので、動詞や動作性の名詞の語基がつくと、「ひとまとまりの動作の繰り返しをする、よくそうやる、やってしまう」の意味になることがわかる。特に「～てしまう」は付きやすく、語の生産性も高い。非動作性の名詞や形容詞の語基の場合は、「その状態が多い」の意味になり、「ぎみ」と類似する。

4. 「気味」から「ぎみ」へ

4-1 「ぎみ」は名詞「気味^{きみ}」から派生している。ものの味やにおい、風味、気配を表している。古くは「万の物の気味は塩にこそあれ」（『沙石集五ノ七』）⁽⁵⁾、現代は「筆不精の気味がある」「高血圧の気味」などがある。また「気味が悪い」「いい気味だ」のように慣用句に近いものがある。複合語になると名詞と名詞「気味」の組み合わせで、「筆不精気味」「高血圧気味」で「の」をとり、「ぎみ」と連濁する。そして接尾辞「ぎみ」に派生すると、名詞や動詞の連用形を語基として「停滞、困惑、興奮、遅れ、減り」などに付

く。意味は「傾向」ではあるが、「今、その状態になりつつある」となる。

4-2 「ぎみ」は、実例で見ると71例中23例が動詞語基で、48例が名詞語基となる。名詞語基が多いことがわかる。「ぎみ」は「がち」のように一纏まりの動作や変化を捉えているのではなく、前と比べての違いを今の状態として述べているのである。かなり具体的な状態になる。

5) 円相場は下がりぎみだ。

6) 日本の経済は停滞ぎみである。

すなわち5)も6)も「以前は上がっていたが、今は下がっている」の意味になる。先に名詞から見ていく。名詞ならどれも語基なるかというそうではなく状態を述べる具体的な名詞に限られてくる。そして7)のような意味の名詞は「ぎみ」に付きにくい。

7)-1 病気ぎみ ×

-2 病気がち ○

「病気がち」はいま病気なのではなく、以前から何度も病気をしていたことを述べている。一方「ぎみ」が「病気」に付かないのは、今の状態を表すため、「病気」では一般的な言葉すぎて十分ではないのである。「病気」の下位分類になる「風邪、熱、腰痛、頭痛、充血、腫れ」などの具体的な語に付いて現状がそうなりつつあることを説明するのに適している。同様に「雨」は付かないが、「小雨、霧雨、時雨」などの下位分類になる具体的な語には付きやすいことがわかる。他にも統計的な意味での「動向」の下位分類として「減少、横ばい、増加、沈滞」、他に「デフレ、インフレ、品薄、興奮、困惑、抑制、緊張、過熱」なども挙げられる。

「ぎみ」はこのように今の状態の傾向を表しているところから、その状態になりつつある、その状態の方に寄っていることを、8)のように示すこともできる。

8)-1 ややボールぎみのストライクだった。

-2 売り上げは下降ぎみの横ばいになっている。

ナ形容詞語基は実例が少なかったが、名詞と同じで現在の状態を表してい

る。

「役不足、認識不足、不満」であった。他に「静寂、浅薄、安価、高級、重大、軽薄、慎重、過剰、狭小」などがある。

4-3 動詞語基の場合、「ぎみ」は「上がり、下がり、減り、太り、浮かれ、控え、ためらい」などの変化を表す動詞につき、現在の状態を述べている。9) のように動作を表す動詞には付かない。

9) 休みぎみだ × 読みぎみだ ×

変化を表す動詞の場合、10) で見るように「ぎみ」と「がち」は類似する。「がち」は繰り返しの変化が起きていることからその状態になっていること示す。

10)-1 のどが渴きぎみだ

-2 のどが渴きがちだ

しかし、「がち」は以前からその状態が何度も起きることを表しているので、現在の状態を必ずしも表しているわけではない。一方、「ぎみ」は今の状態を言及し、頻度は関係ない。現在の一回だけの状態である。11) で「今」をつけてみると内省だが、「ぎみ」は可能だが、「がち」はおかしい。

11)-1 今、のどが渴きぎみだ。

-2 今、のどが渴きがちだ？

「がち」が成立するには、12) のように動作の繰り返しの条件や理由がはいる。

12) 夏の朝は目覚めると、のどが渴きがちだ。

実例で見ると、

13) 水泳は苦手だった。十分練習して遠泳班に合格したのに「本番は無理じゃないかな」。緊張しながら泳ぎ始めた。(中略) まもなく近くでタンカーが動き出した。波が大きくなる。「気をつけてください」。ボートからの先生の声は無我夢中で手足を動かす。平泳ぎのフォームは崩れがち。足の裏に何か触れた。(『朝日新聞』2010/8/17付) *傍線は筆者「ぎみ」でもよさそうだが、意味は何回も「崩れている」ことを重視するので「がち」になる。「ぎみ」ではそのときだけに過ぎなくなる。

「ぎみ」の名詞語基は具体的な状態を表す名詞がつくと造語性が高くなる。

また動詞語基の場合、変化の意味の動詞のみとなる。「がち」との意味の共通性もあるが、それぞれの意味の範囲が違うことがわかる。

5. 「がち」と「ぎみ」の派生語の機能

5-1 4までは語基の品詞分類して派生語の意味を見てきた。この章では文法レベルの機能、さらにコンテキスト内の文の特徴を実例を見ながら考察する。

「がち」はナ形容詞性接辞として扱われているが、名詞性接辞も少しある。「がちな」は141例だが、「がちの」は9例である。

14)-1 不在がちなお宅があると困る

-2 引きこもりがちの一人暮らしの老人

一方、「ぎみ」は名詞性接辞として扱われ、ナ形容詞性接辞にやや移行しつつあるようだ。「ぎみの」は7例だが、「ぎみな」は3例であった。⁽⁶⁾

15)-1 今の時期、みかんは品薄ぎみの状況だ。

-2 日曜の午後はテンションが下がりぎみな時間だ。

5-2 文法機能として、「がち」は言い切りの「がちだ、がち（体言止め）、がちだが、」、連体修飾の形で「がちな」、(「がちの」のも少し)、連用修飾の形で「がちに」がある。この中で言い切りの形が一番多く、479例中306例である。「がち」のある多くの文は言い切りで現れることがわかる。

一方、「ぎみ」は言い切りの「ぎみだ、ぎみ（体言止め）」、テ形「ぎみで」、連体修飾の形で「ぎみの」、連用修飾の形で「ぎみに」がある。この中で「ぎみだ、ぎみ」が一番多く、71例中36例である。「ぎみ」のある多くの文も言い切りで現れることがわかる。

5-3 一文の中での意味とニュアンスをみていく。「がち」について森田(1985)は「アブノーマルな状態にややもすればなっていく傾向」と述べ、ニュアンスはマイナス傾向と考えている。「アブノーマル」というと普通と違うと捉えてしまうことが多いので、発話者にとって好ましくない状態になるとした方がわかりやすいだろう。言い換えると「発話者がよくないと思ってい

る動作、または状態の傾向」である。補足すれば、「がち」は一纏まりの動作や変化に注目していることから、何度も経験して失敗している、無意識の動作で好ましい結果にならなかったことを認識しているのである。だがその動作をしてしまう、またはその変化を許容することを意味している。それがマイナス傾向となる。

16)-1 何度も間違えると、自信を失いがちになる。

-2 二次元や虚構の世界へ行きがちだ。

16)-2のようにマイナスの意味をもつ語基ではない「行く」でも、「がち」が付くとマイナス評価をすることになる。さらに、3でも見たように、「～てしまう」が動詞語基につきやすいことから「行く」のような動作動詞に付いてマイナス状態のニュアンスを述べやすくしている。17)-2の方がマイナス状態のニュアンスが強くなる。

17)-1 ベルトを外しがち

-2 ベルトを外してしまいがち

一方、マイナス傾向のニュアンスを持たない場合もある。非動作性の名詞語基の場合、慣用的になっているので、人の様子や態度を表している。この点では「ぎみ」に近い意味になっている。特に「遠慮がち」と「遠慮気味」は同じ意味になるようだ。⁽⁷⁾

18)-1 遠慮がちに入ってきた。

-2 遠慮気味に入ってきた。

5-4 「ぎみ」については森田（1985）は「話し手の主観としてその徴候ありと判断し、好ましくないマイナス状態の傾向」としている。「ぎみ」は今現在の状況や人の様子や態度を述べているので、マイナス評価の場合もそうでない場合もある。マイナス評価はいつもと違う、変だと判断する場合である。マイナス評価

19)-1 やや太りぎみになった。

-2 地方は人口が減りぎみ、土地は余りぎみという状態だ。

現況、様子、マイナス評価はない

20)-1 口を閉じぎみにして飲む。

-2 雲はほかしぎみに描く。

20) の例は、(6) の例のように「～の状態に近い、～に寄っている」という判断である。マイナス評価ではなく基本よりややずれているという程度に変化している。

5-5 構文の中での機能を見ていく。森山(1986)が述べているように「がち」、「ぎみ」が語基だけにつくのだが、21) で示すように述語に来ると句全体を包み込んでいるように見える。

21)-1 クーラーをつけがちだ。

-2 暑さでクーラーが品薄ぎみだ。

21) は「クーラーのつけがち」、「暑さでのクーラーの品薄ぎみ」(×) という名詞句にはなりにくい。文全体「クーラーをつける」、「暑さでクーラーが品薄だ」に「がち」、「ぎみ」がついた節のようになる。

また共起する副詞は、「がち」は「とにかく、ややもすると、つい、意外と、よく、いつも、どうしても」などである。「ぎみ」の場合は「やや、若干、少し、いささか、むしろ、どちらかという」となどである。これらの語が付くと、さらに節の形を整えるようだ。22) に挙げる。

22)-1 探偵小説は、つい最後まで読んでしまいがちだ。

-2 先生はとにかくできる子がいい子だと判断しがちだが、子供たち間では人気があるとは限らない。

-3 一部の地域ではやや施設が不足ぎみだ。

つぎにコンテキスト内で「がち」「ぎみ」が表出する前提条件だが、まず条件や理由が述べられることだ。なぜなら4語彙レベルで述べたように何度も経験して認識していることが条件や理由の節となるからだ。「がち」はある条件下でそうなるということがわかる。23) のように条件や理由が前に述べられる。

23)-1 強風になると、電車が遅れがちだ。

-2 クーラーをつけると冷えるので、特にお年よりは体に悪いと思

がちだ。

一方「ぎみ」は以前と比べて今の状態が違となるので、前の状態を理由で述べたり、比較して述べたりしている。

24)-1 運動しなくなったので、175センチ、70キロとやや太りぎみだ。

-2 今年は去年に比べて猛暑で早くも夏バテぎみの人が多。

そして、ニュアンスは前後に表わされる。「がち」はマイナス評価を伴い、その前後に真意を述べることになる。一方「ぎみ」は普段と少し違う様子の判断であるため、前後の文に現況を詳しく述べる文が表される。

25) 「洗濯や掃除は週に1回まとめて。家事では食事が一番面倒かな。でも、節約のため、できるだけ自炊を心がけている。会社近くで食べる昼食は肉が中心になりがち。自宅では主に野菜を食べる。ご飯は週末まとめて炊き、小分けにして冷凍。野菜炒めなどおかずも大量に作って冷蔵庫に入れておく。」（『朝日新聞』「初めてのひとり暮らし」2010/3/20付）

この例では昼食が肉中心でよくないというニュアンスを持つ。だから自宅では野菜を中心に作って食べるということを前後の文で表している。

26) 前回のテストが少々よかったので油断気味。弟とカードゲームをしたり、寝転がって本を読んだりすることが多くなった。（『朝日新聞』夕刊「受験家族」2010/3/20付）

この例では、テストがいつもよりよかったと以前と違うことを述べている。それで、具体的にいつもよりのんびりしたことが書かれている。

一方で、ニュアンスがまったく表出せず、含ませているところに意味がある場合の文も27) のようにある。

27)-1 しし座（7/23~8/22）対人面がギクシャクしがち。

-2 今日の運勢 疲れ気味。新しいことは別の日に。

前述の通り、「がち」はニュアンスを含め、真意を述べることが多いので、逆接表現で「とかく／つい ～しがちだが、・・・」となることが多い。

28) 生活情報誌は、読者の中心が主婦であるために、メインテーマが「節

約」だと思われがちですが、そうではありません。重点を置いているのは「納得感のある充実した暮らしをしましょう」ということです。(『朝日新聞』「くらし考」2010/7/11付)

29) 冷酒だと冷たさにひかれ、酔いが回る前に杯が進み量を飲んでしまいがち。でもお爛をつけながらだと自然とゆっくりペースになる。(『朝日新聞』「くらしの達人」2009/12/20付)

28) の例は「がち」の後でニュアンスが表現され、真意も明確になっている。29) の例はニュアンスは飲みやすく速いペースで飲んで酔うのはよくないであり、しかしお爛ならゆっくり飲んでいけると真意を述べている。

「がち」と「ぎみ」の派生語としての機能を見てきた。マイナスのニュアンスを持つという点では共通するところもあるが、動作に注目する「がち」と今の状態を述べる「ぎみ」では、文中での現れ方は違う。コンテキストに依存しているので、ニュアンスは前後の文に何らかの形で表現される。特に「がち」は逆接の接続表現で、真意を述べていることがわかった。

6. まとめ

この論では類似性のある接尾辞「がち」と「ぎみ」を比較しながら形態や意味の相違を見てきた。「がち」はナ形容詞性接尾辞となり、動詞語基が多い。それは「がち」が動作や変化の頻度に注目しているからである。また動詞語基に「てしまう」のような完了表現がつきやすい。これは「がち」のニュアンスと一致するからであろう。非動作性名詞や形容詞の語基の場合は「ぎみ」に類似して、状態を表している。一方、「ぎみ」はナ形容詞性接尾辞に移行しつつある名詞性接尾辞である。名詞語基がかなり多い。一般的、総称的な名詞でなく、その下位分類にあたる具体的な状態の名詞になることを考察した。そして派生語としてこれらの意味が、文や文脈でどのような機能をしているかを見てきた。言い切りの形「がちだ、ぎみだ」では、語基だけでなく文全体を包摂する形になる。ニュアンスは文脈の前後に表出されており、「がち」の場合は「とかく/つい～がちだが」のように複文的な形の接続表現を

とっている。固定した文型になりそうなかたちである。以上が接尾辞「がち」と「ぎみ」の特徴である。

この論では限定した範囲でしか見ていないので、「がち」「ぎみ」だけでなく傾向の種類として『中上級を教える人のためのハンドブック』であげている「-げ、-っぽい」も本来なら見るべきであろう。とりあえず、類似性のある「がち」と「ぎみ」だけを取り上げたが、今後この4つを比較しながら「傾向」全体を考えていきたい。

接尾辞は個々の意味や用法の違いがわからず調べることが多い。辞書で調べても似たような意味しか載っておらずわからないままになってしまう。だからこそ一つ一つの意味用法を丁寧に積み上げていく必要がある。またその過程で見えてくる共通性や一般性を提示し、接尾辞の特徴を明らかにしていかなければならない。

しかし、拙論では接尾辞全体を考える上で、助動詞や補助動詞、形式名詞などとのつながりが不十分であったと思う。そしてニュアンスを持っていることがどんな表現を表出するのかなど、今後の課題とするところが多い。これからもう少し精査して論を展開していきたいと考えている。

注

- (1) やや古い表現だと思うが、「山がち、黒目がち、伏し目がち」など、「ぎみ」は「高血圧の気味→高血圧気味」など
- (2) 阪倉の言う「接尾語」はいわゆる現代の「接尾辞」と同じと考えている。あえて「接尾語、接頭語」というのは古くからある「接辞」が付属的で助詞、助動詞、活用語尾などを一纏めに「てにをは=辞」と呼ばれていたため、それと違うという意味からである。
- (3) 森山は通常の語彙形成の違反例として「5つの質的な違い」を分類している。

第一 「～展」「～派」など 固有名詞やある程度の自由に引き伸ばし

例 目で見る池田の歴史展

第二 ～用、～風、～向き、～式、～的など 形容語化

例 災害の起こった時用

第三 ～めく、～ぶる、～っぽいなど 一定の特性を含意するものが語基に

例 進歩派の学者ぶる、大家の坊ちゃんめく、現代の若者っぽい

幸田 佳子「接尾辞「がち」と「ぎみ」について」

第四 ～中、～済みなど アスペクトを表す形式

例 アメリカ海軍の第一線で活躍中の戦闘機
私はその件を調査済みだ。

第五 ～そうだ、～にくい、～やすい、～たて、～がちなど 格助詞などをそのまま保存して基本的に節をとる。

例 雨が今にも降りそうだ。
彼は今朝散髪したてだ。

名詞句にならず、節として機能すると考えられる。

(4) 「がち」と「ぎみ」の語基の品詞と形態の実例

| 語基 | がち | ぎみ |
|-------|------|----|
| 動詞 | 423 | 23 |
| ～てしまう | (31) | |
| 名詞 | 56 | 45 |
| 動作性 | (38) | |
| ナ形容詞 | — | 3 |
| 総数 | 479 | 71 |

| 形態 | がち | ぎみ |
|------|-----|----|
| —の | 9 | 7 |
| —な | 141 | 3 |
| 言い切り | 309 | 36 |
| —に | 20 | 22 |

語基に関して

- ・「がち」は「ぎみ」に比べ、実例が非常に多い。話し言葉に多かったが、書き言葉としても多く使われている。一方「ぎみ」はいずれも頻繁には出てこないことがわかった。
- ・ナ形容詞の語基の実例は非常に少なかった。
- ・「～てしまう」は他の動詞語基の形態（受身、使役など）に比べ、際立って多かった。423例中31例の意味。「～てしまう」の意味は、吉川（1993）を参考にした。

(5) 「伊豆山に学生ありけり。弟子も下人も他行の時、塩売り一人来たりて『塩や召し候ふ』といふ。房主、『まことに塩をば、熊野の道にも百味と云ひて、万のものの気味は塩にこそあれ』とて、『買はん』と云ふ。」『沙石集』「巻第五ノ七 学生の見、僻みたる事」より

(6) 「ぎみの」が7例で「ぎみな」が3例と非常少ない用例数でこれだけで名詞性接尾辞と判断するのは早計かもしれない。しかし「がち」のほうが「がちの」が少し残っていることからナ形容詞性接尾辞になっていることを考え合わせると「ぎみ」もナ形容詞性接尾辞へ移行することは考えられる。

(7) 『分類語彙表増補改訂版』（2004）では3,3420行為で同項目になっている。

参考文献

黄其正 2004『現代日本語の接尾辞研究』 漢水社

- 阪倉篤義 1986「接辞とは」『日本語学 3月号』明治書院
白川博之監修 庵功雄他 2008『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』ス
リーエーネットワーク
飛田良文・浅田秀子 1992『現代形容詞用法辞典』東京堂
飛田良文他編 2007『日本語学研究辞典』明治書院
森田良行 1989『基礎日本語辞典』角川書店
森山卓郎 1986「接辞と構文」『日本語学 3月号』明治書院
山下嘉代 1995『形容詞性接尾辞「-ばい・-らしい・-くさい」について』『講座日本語教育』
第30分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
吉川武時 1993『日本語文法入門』アルク

資料

- ・無住一円『沙石集』小島孝之校注 新編日本古典文学全集 52
- ・『朝日新聞』2009/2/20～2010/8/18 記事、解説、投稿、家庭欄など
引用していないが、実例数として使用
- ・赤川次郎2008『野獣と美女』角川文庫
- ・宇江佐真理2001『甘露梅』光文社
- ・上田秀人2005『破斬』光文社文庫
- ・乙川優三郎2010『麗しき果実』朝日新聞社
- ・小早川淳2009『將軍の料理番』学研M文庫
- ・重松清2007『小学校5年生』文藝春秋社
- ・高田郁2009『八朔の雪』ハルキ文庫
- ・畠中めぐみ2008『アイスクリン強し』講談社
- ・諸田玲子2001『あくじゃれ』文藝春秋社
- ・和田はつ子2007『すみれ便り』小学館